

「君がいなくなった後の教室」

佐々木
雄太

【人物一覧表】

田辺 公一(18) ……高校生

佐奈田 光希(17) ……高校生

安斎 夏美(18) ……高校生

川谷 庸介(18) ……高校生

田辺 春好(51) ……会社員

田辺 厚子(48) ……主婦

田辺 友妃子(14) ……中学生

浅田 誠(43) ……高校教諭

【あらすじ】

海望高校口組に、佐奈田光希という転校生がやってくる。光希は明るく前向きな性格で、すぐにクラスに馴染んでいく。公一は光希に惹かれ、徐々に距離を縮めていく。ある日、公一は光希の口から、家族でデンマークのペンハーゲンに移住すると聞かされる。光希の最後の登校日、公一は光希に船の模型のプレゼントを渡し、互いに別れを告げる。

○海望高校・教室（朝）

教室の中。窓の外から、鈍い陽の光が射し込んでいる。夏。田辺公一（18）が、指をパッチンパッチンと弾いている。教室の中の陽が、半分翳る。担任教師、浅田誠（43）が教室の中に入って来る。

浅田「（タオルで額を拭きながら）あっつい、あっつい、と……」

公一、指を鳴らすのを止める。浅田の後ろから、佐奈田光希（17）が続けて入って来る。

光希「（緊張した声で）ええー」

浅田、黒板の上に、文字を書き始める。黒板の上に、佐奈田充希、と文字が埋まる。

浅田「えーっと、半年だけだけれど、新しく仲間になる、佐奈田光希さんです。さあ、佐奈田さん、前に出て」

光希、遠慮しながら前が出る。

光希「佐奈田です。佐奈田、光希です。読みづらい名前って、よく言われます——半年だけですが、よろしく願います」

ヒュー、という歓声が教室の一部で上がる。公一、急に目を俯せる。光希、また黒板の前に戻る。

浅田「佐奈田さんの席は、あっちね——」

光希、教室の一番後ろの席の、安斎美美（18）の横に座る。

夏美「（光希をチラチラ見ながら）ふーん」

光希「（夏美に目を動かして）よろしくね」

夏美「（興味がなさそうに）ふーん」

公一、黒板に再び目を上げる。浅田が「佐奈田光希」と書かれた、黒板の上の字を消す。

浅田「（教科書を開きながら）さあ、数Ⅱの復習だ。えーっと前回の続きは……と」

○同・教室（夕）

海望高校の、C組の放課後。公一が、

鞆に教科書を詰めながら、光希と夏美の様子を少し気にして見ている。夏美と光希、話しをしている。

夏美「へえー色々大変だったんだね。でも、わざわざこの学校に入らなくても良いのよね」

光希「(少し笑って) ええ、でも来ちゃったから」

夏美「(聞き返して) えっ?」

公一、夏美と光希の前を通り過ぎる。

公一、通りすがりに、光希と目が合う。

光希「(笑って) よろしくね」

公一「……ああ。うん」

公一、教室から出て行く。夏美、振り返って、公一が出て行く様子を見る。

光希「何の声?」

夏美「ボート部、ボート部の声だよ。ウチら
の高校、ボート部あるからさ。気が付かなか
った?」

光希「へえ、素敵——でも、あたし全然ス
ーツ苦手」

夏美「わかるー。そういう感じ！」

光希「そう？」

窓の外から、ボート部のかけ声。夏美
が教室を出て行き、光希がその後、教
室を続けて出て行く。

○田辺家・リビング（夜）

公一の家のリビング。公一の母、田辺
厚子（48）と、父親の、田辺春（5

1）が食膳を囲んでいる。

公一「このエビチリ美味しいな」

厚子「良かったー。お母さん頑張って作っ
ち
やった」

春好「公一が褒めるなんて、珍しいな」

窓のからザーツという雨の音。公一、
窓の外に目を移す。

公一「（箸を止めて）あつ、雨」

厚子「涼しくなるわね」

公一、残っていた御椀のご飯も平らげる。食器を下げる。キッチンで軽く洗い始める。

厚子「公ちゃん、もうすぐ受験ねー。お母さん全然期待しないから、頑張って」

春好「(新聞のスポーツ欄を開いて) まあー、どっか大学に滑り込んでくれれば良いよな」

公一「少しは期待！」

公一、自室の二階へと階段を上がって行く。春好、テレビを点ける。甲子園の模様の、解説番組が流れている。

○同・キッチン(夜)

公一が、一階の田辺家の台所で、ポットの麦茶をコップに注いでいる。公一の妹、田辺友妃子(14)姿を現す。

友妃子「お兄ちゃん……」

公一「(もう一つコップを出して) 麦茶飲む？」

友妃子「お兄ちゃんの高校、新しい人入ったらしいじゃん。今さら転校生」

公一「どこから聞いた？」

友妃子「風の噂から、リークした」

友妃子、麦茶をゆっくりと口をつけて

飲む。公一、麦茶を一息で飲み干す。

友妃子「あたしも、お兄ちゃんの高校入ろうかな……。なんかあるらしいじゃん、ボート」

公一「ああ」

友妃子「（オールを漕ぐ真似を両手でして）お兄ちゃんはしないの？」

公一「全然、全く知らない」

友妃子「淋しい青い春ですね」

友妃子、笑う。

友妃子「めっちゃ美人らしいじゃん」

公一「（少し考えて）あー」

友妃子、コップを流しに戻す。公一、

コップを持ったまま立っている。

友妃子「ご馳走さま！」

○海望高校・教室（昼）

公一と、公一の友人の川谷庸介（18）が、話しをしている。庸介、パンを食べている。

公一「なんか、ずっとお前パン食べてたよな」

庸介「（パンを食べながら）金、貯めたいから」

公一「フェンシング辞めなかったね」

庸介「うん。まだまだあるけどさ」

公一、パック牛乳の牛乳を一息で飲み干す。

公一「学費高かったよなー。私立」

庸介「（笑って）どうしたんだよ？ 親みたい」

公一「結局、フェンシングもボートも縁がなく、卒業かー」

庸介「お前、将棋強いらしいじゃん」

公一、目を上げる。夏美と光希、話しをしている。公一、直ぐに目をそらす。

庸介「卒業したら、どうする？」

公一「とりあえず旅行したいな。この辺不便だし」

康介「あ、それ良いかも」

公一、立ち上がる。教室の外に出ていることとする。

庸介「(公一の背中に向かって) たまには楽しくやろうぜ！」

○同・自販機前(夕)

公一、自販機の前で、コーラを買うように思い、小銭を数えている。

光希「(急に現れて) あっ？」

公一「……ああ」

光希「田組の人？」

公一「……そうだよ。一応」

光希「友だちが多いんだ」

公一「三年近くいれば、増えるよ」

光希「そうだよね」

公一、二百四十円を財布から取り出し

て、コーラを二本買う。

公一「（コーラを光希に差し出して）コーラとか飲む？」

光希「えっ？ 貰っちゃって良いの？」

公一「良いよ。大丈夫、別に」

光希、コーラの缶をしばらく眺めて、嬉しそうにプルタブを開ける。

光希「（手を止めて）この学校、珍しい部活多くない？」

公一「フェンシングとか？ 冴組だったら、

川谷がフェンシング部だよ」

光希「ボート部もある」

公一「（考えながら）……そうだよね」

光希、立ったまま、コーラを飲んでい
る。

光希「コーラ美味しい」

公一「そう？ 暑いからね」

光希「フェンシング見たいな。この近くだった
りする？」

公一「やっていると思うけど——見れない

よ。入れないと思う」

光希「そうだよね」

光希、空になったコーラの缶を、公一に渡す。

光希「(にっこり笑って) 捨てておいて」

公一「ああ……」

光希、何も言わずに海望高校の外に出ていく。公一、コーラの缶を二つ回収のゴミ箱に捨てる。

公一「(独り言を言って) ふーん。そういう人」

○同・教室(昼)

浅田、数学の授業をしている。

浅田「この式に代入」

夏美「難しくない……やば、全然分かんない」

夏美の独り言が、教室の中に響く。教室の中の緊張が緩む。

浅田「今難しいという声が聞こえたけど。(チ

ヨークで黒板を叩きながら）入試に数学がある者は、今理解しておかないと、まずいぞ」

公一、考えている。庸介、真剣にノートをつけている。

夏美「あつ、凄い雨だ」

窓の外に、雨降り始める。

○同・廊下（昼）

廊下で、夏美と光希、立ち話をしている。

夏美「難しいよね。数学」

光希「うん——最近、全然分かんない」

公一、庸介と一緒に、夏美と光希の前を通り過ぎる。

光希「（公一の姿を見て）あ、田辺君、こないだご馳走さま！」

公一「えっ？ うん」

庸介、公一に話しかける。

庸介「佐奈田さんと、なんかあった？」

公一「いや、ないと思うけど」

庸介「ご馳走さま、って言ってたぜ」

公一「何か勘違いしてるんじゃない？」

庸介、公一から離れて、海望高校を出て行く。

庸介「お前は良いよな。俺はフェンシングもあるし」

公一、ゆっくりと歩いて海望高校を出て行く。

○田辺家・リビング（夜）

公一、リビングでテレビを観ながら、

数学の教科書を眺めている。

友妃子「ねえ」

公一「（興味がなさそうに）ああ」

友妃子「兄さん、最近輝いていない？」

公一「はっ？ 馬鹿じゃないの」

友妃子「いや。そう思う」

公一、教科書を閉じて、立ち上がる。

公一「何にもないからさ」

友妃子笑う。公一、友妃子を置いて、

二階へと上がって行く。

○同・公一の部屋（夜）

公一、光希にラインの電話をかける。

公一「もしもし」

光希（声）「あっ、田辺君？」

公一「そう」

光希（声）「今、夏美と電話してたところ。終わったから丁度良かった」

公一「安斎さんと電話してたんだ？」

光希（声）「うん」

公一、窓をカラカラと音を立てて開ける。

公一「すっかり涼しくなったね」

光希（声）「うん。秋だからね」

公一「夜って良いよね」

光希（声）「分かる。分かるかも」

公一、ソファに座る。

公一「卒業わりと近いね。佐奈田さんと仲良くなれて良かったかも」

光希（声）「夏美と同じこと言われた」

光希、電話越しで笑う。

光希（声）「今ね。絵見てた」

公一「（聞き返して）えっ。絵？」

光希（声）「あたし、絵が好きなの。前は、美術系の高校にいたからかな」

公一「へえ。そっか」

光希（声）「レンブラントって知ってる？」

公一「いや——全然知らないな」

光希、再び電話越しで笑う。

光希（声）「卒業したら、ここからデンマークに行くの」

公一「なんか言ってたね」

光希、電話口で嗚咽し始める。

光希（声）「（泣きながら）川谷くんとも、夏

美とも仲良くなれたのに、酷いわ」

公一「デンマークのどこ？」

光希（声）「コペンハーゲン」

公一「そっからでも、みんなに電話してよ」

光希（声）「ええ。そのつもり」

一階から、友妃子、公一を呼ぶ。

公一「またすぐに夏が来るよ」

○海望高校・教室（朝）

海望高校。冬。浅田、教室に入ってくる。

「ああ。さつむい、さつむいと……」

黒板に、佐奈田光希さんありがとう、と大きく書かれた白い字。

浅田「知っていると思うけど、佐奈田さんは、ご家族の都合で、海外に行かれるそうです」

夏美、話を聞いている。庸介、唇を嚙んで下を向いている。

浅田「佐奈田さん、最後に㊦組のみんなに挨拶して」

光希、黒板の前に出る。

光希「短い間でしたが、海望高校は本当に——楽しかったです。私は、コペンハーゲンっていうところに住みます。どっちかってい

うと、不安な気持ちの方が大きいです」

夏美「光希！」

光希「夏美と、友だちになれたのに——本当にさびしい」

庸介、光希の前へ出る。

庸介「これ—— \square 組のみんなからだから」

庸介、光希にプレゼントを渡す。

光希「(袋を開けて) これ——ボートの模型……」

浅田「佐奈田さんが、ずっとボートを見たがっていて、なかなか見る機会がないから、みんなで決めたみたいだよ」

光希頷く。夏美泣く。

○街(夜)

光希を追いかけるようにして、公一、歩いている。光希立ち止まる。

光希「ここでお別れ」

公一「コペンハーゲン——気を付けて」

光希「ええ。そのつもり」

公一「ボートの模型のプレゼント、実は川谷の案なんだ」

光希「えっ？」

公一、光希を抱きしめる。

公一「（光希を抱きしめながら）水に浮かべてみて」

光希「うんうん」

公一、光希を放す。

公一「佐奈田さん、光希、さようなら」

光希「（涙を流して）ええ、さようなら」

了